

初代院長

柴田 彊(シバタ ツトム) プロフィール

1909年(明治42年)11月17日

～1979年(昭和54年)12月23日(享年70歳)

【経歴】

東京医学専門学校(東京医専)【現：東京医科大学】卒業

【第二次世界大戦中の所属】

大日本帝国陸軍

- ・近衛歩兵師団第四聯隊 陸軍軍医少佐として所属。
- ・関東軍独立守備隊 陸軍軍医少佐として所属。

【研究成果】

満州ハルピンで航空医学を担当。

極寒の満州で最長航続記録を打ち立てた第八航空研究所で中島飛行機の新型試作機を高々度に飛行させ、当時の日本では珍しかった酸素マスクの実験や耐寒耐圧試験と人体の影響の基礎的データを集積し分析した。

これらの成果は戦後、満州医科大学や熊本医科大学の緒方惟弘教授の生理学教室において、医学博士号論文としてまとめられた。

その後、この論文とデータは『～南極物語～(タロとジロ)』でも有名な『第一次南極越冬隊』の基礎資料として採用された。

【傷痍軍人として】

一般に陸軍軍医少佐という立場は、負傷した兵士の治療を主とし、いわゆる後方支援という位置づけであったが、血気盛んであった柴田彊は、戦況に応じ、最前線に出向き、陸兵とともに戦火を共にした。

昭和14年、中支の前線で敵の迫撃砲弾を両下腿に受け負傷し、後方送還となった。

戦後も榴弾の数回の摘出手術を受けたが、脚に後遺症が残り続けた。

【軍人恩給診断作成】

先の戦場での経験が見込まれ、多くの傷痍軍人の方から軍人恩給診断作成を頼まれた。

軍人恩給診断書は軍隊用語を交えた独特の様式で、普通の医学用語では、厚生省援護局の査定には全く通用せず、一通完成させるのにかなりの日数と労力を要するものであった。

【開業・診察内容】

自身も傷痍軍人であったことや戦場での経験が見込まれ、多くの傷痍軍人の方が来院され、その評判が一般の方々にも広く知れ渡り、開院まもなく、多くの患者が来院し、山口市の医療の一角を担う診療所となった。

手術においては、開頭手術・開腹手術・がん手術・骨折手術・肛門手術といった外科系全般、ほぼ全身の手術を行った。

煙草と酒を好んだ柴田彊は、時に患者と灰皿を共有し、できるだけ緊張させてしまわないよう注意を払い、本心が聴ける問診を心がけたり、時に生死をくぐり抜けた傷痍軍人同士と言っては、一献、酌み交わしながら…というユニークな診察スタイルであった。

一方で、患者にとって、厳しさも必要であると判断した際の形相は、火達磨柴田と称された。

また、患者が診察室に入ってくるなり、その方の痛い箇所と全く同じ箇所が痛くなるという不思議な体験を幾度となくし、痛み分けの治療と前向きに捉え、患者中心の医療を心がけた結果、当時の患者や患者家族からは『親身になって治療にあたってもらえる』と信頼できる医師として、高い評判を得ることができた。

